
Jの領域

HEERO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Jの領域

【Nコード】

N4692L

【作者名】

HERO

【あらすじ】

わけの分からん妄想や、考えをダラダラと書き記したものです。

対極（前書き）

この法則は色々な事に応用できるかもしれませんが。

対極

磁石のS極とN極のように、対極に位置するもの同士は相性が良く、引き付けあうと言います。

実際、正反対の組み合わせが意外な絶品料理を生み出したり、大ヒット商品の開発に繋がったという話は珍しくありません。

今回僕はその法則を絵で試してみました。

『美男美女』 + 『下品な言葉』

> i 1 1 5 7 3 — 2 1 0 < > i 7 0 1 8 — 2 1 0 <

こう組み合わせる事で、キャラの外見と、汚い言葉がそれぞれ引き立ちます。

ただ、汚い言葉を引き立てる事に何の意味があるのか、その答えは見つかりそうにありません。
完全に応用を間違えましたね…

なお、あまり下品な言葉を使っている場ではないので、小学生レベルの言葉を使用しました><

対極（後書き）

魅力的なキャラは、真逆のギャップを持っているものです。

ミラー・ザ・マジック(前書き)

共感、いただけますでしょうか？

ミラー・ザ・マジック

この世界には“ビューティフルミラー”（勝手に命名）と呼ばれる鏡が存在します。

たいしたことないはずの自分の容姿が、何故か幾分マシに見えてしまふ不思議な鏡のことです。

僕が見つけたビューティフルミラーは三つ。

- ・某古本屋のトイレの鏡
 - ・某焼肉屋のトイレの鏡
 - ・某デパートの一階のトイレの鏡
- （並びは魔力の強い順）

基本、トイレです。

ビューティフルミラーに写る自分を見ることで、僕は少しの間だけ自信と高揚感を得ることができます。

そのまま鏡法（美容法的一种）を行うのもいいかもしれませんがね

でもその後、家に帰って鏡を見たら……吐血！！

自宅の鏡って奴あ、何で主人に気を使ってくれないんでしょうね

（怒）

現実を見せるなー！（泣）

ミラー・ザ・マジック（後書き）

べ、別に不細工なんかじゃないんだからね！

こんな悪の組織は駄目だ（前書き）

くだらない妄想です。

こんな悪の組織は駄目だ

僕は清掃と物流のアルバイトをしております。

どちらの仕事も慣れてしまえば体が勝手に動いてくれるので、僕はたいてい妄想をしながら作業しています（漫画とか小説のネタにするため）。

この前した妄想は“こんな悪の組織は駄目だ”（セオリーとのギャップがネタになります）。

作品に…使えるかな；

【こんな悪の組織は駄目だ】

- ・ 日々、罪悪感に苛まれている
- ・ アジトに回覧板が回ってくる
- ・ 戦争反対
- ・ 活動が警察に容認されている
- ・ 制服がジャージ
- ・ 極力、女子供を狙う
- ・ 活動拠点が2ちゃんねる

- ・目的が一向に定まらない
- ・雨天中止
- ・命令に背くと露骨に嫌な顔をされる
- ・そもそも命令されることが無い
- ・そもそも組織の存在意義が分からない
- ・アジトがヨネスケに突撃される
- ・時給750円
- ・研修期間中は650円
- ・アジトのトイレ掃除をしているおばちゃんの時給は950円
- ・3人に1人が生活習慣病
- ・ボランティア活動に全力を注いでいる
- ・道端のゴミを見過ごせない
- ・落したラブレターが黒板に貼られている
- ・作戦会議をする気力が無い
- ・そもそも議題が無い

- ・そもそも組織の存在意義が分からない
- ・慎重を期し、まずは地方から手中に納めようとする
- ・山梨県民に振り返りにされる
- ・副業の方が充実している
- ・年功序列制度を導入する
- ・年功序列により掃除のおばちゃんが幹部に
- ・ホームページで求人募集
- ・ホームページが荒らされ組織壊滅
- ・アジトが電話帳に載っている
- ・いたずら電話で組織壊滅
- ・アジトが観光名所となっている
- ・観光客が捨てたゴミで組織壊滅
- ・四天王がいない
- ・四天王がいるにはいるが、一人足りない
- ・四天王がいるにはいるが、一人多い

- ・アジトのセキュリティがセコム
- ・給食が出る
- ・給食費が盗まれる
- ・マルチに引つ掛かり組織壊滅
- ・組織を抜けることを卒業と言う
- ・ソロ活動が始める者が後を絶たない
- ・ボスが引きこもる
- ・ボス不在の組織をおばちゃんに乗っとられる
- ・任務に失敗した者を笑って許す
- ・そもそも任務が無い
- ・そもそも組織の存在意義が分からない

ぬうう…とりあえずもっこれが限界^^；
でもこれだけあれば悪の組織系のネタには困らない…かな。
悪の組織を題材にした作品とか面白いかもしれませんね♪

こんな悪の組織は駄目だ（後書き）

妄想こそ、この世で最も贅沢な遊び。

サンサーラ（前書き）

ー見ネガティブですが…

サンサーラ

もし生まれ変わる事が分かったら、僕は今すぐに死にます。来世に賭けます。

生まれ変わった自分も気に入らなかったら、またすぐに死にます。来世に賭けます。

当たりが出るまで、何度も何度も死を繰り返します。

当たりの人生でも辛い事はあるでしょうが、その時はまた死ねばいいだけ。

楽なもんです。

…でも今の所、生まれ変わる保証が無い。

だから今の自分で頑張るしかないわけです。

今の自分が気に入らなければ、今の自分を変えていくしかないわけです。

そんな努力をしているうちに、実は自分が当たりだった事に気付ける日が来るかもしれません…。

サンサーラ（後書き）

さりげなくポジティブな内容だったりします。

悟りの稲妻（前書き）

世界で一番美味しいアイス。

悟りの稲妻

> i 7 0 2 3 — 2 1 0 <

この間、家庭内でお祝いごとがあったため、僕はブラックサンダーアイスを買ってきて家族にあげました。

（チョイスがおかしい）

みんな美味しそうに食べていましたが、ただ一人、歯の強度に若干問題のある父は、中のクッキーに苦戦していたのです。

僕はそんな父の姿に、人間のはなかさ、生が有限であることを改めて思い知らされました。

人の一生はとても短い。

だからこそ“どう生きたか”、それが重要になってくる。

一瞬、だけど色濃い輝きを放った父は、まさに“黒い稲妻”だったと思う。

その輝きは残像として僕の心に焼き付き、生涯消えることはないだろう。

悟りの稲妻（後書き）

上手いこと言っ たつもりか！

ナマステ〜（前書き）

懐かしいです。

ナマステ

初めて彼と出会ったのは、小学一年生の頃でした。

どの友達の家へ行っても確実に置いてあった格闘ゲーム、“ストーリーファイター2”。

そのキャラクター選択画面に、彼は、“ダルシム”はいたのです。

> i 7 0 2 4 — 2 1 0 <

「火を吹く」、「手足が伸びる」、揚句の果てには「テレポートする」という、インド人を極限まで愚弄したその大胆なキャラ設定に、僕は一目惚れしてしまいました。

特に腕が伸びるという点には惹かれましたね。「飛び道具」強い」という安直な先入観を持っていた当時に僕にとって、ボタン一つで可能な遠距離攻撃は魅力的でした。

…が、いかんせん勝てん！！

伸びた腕が波動拳の餌食となったり、テレポートした先に相手の繰り出した蹴りが待ち受けていたり…。

幼き僕は、ダルシムを捨てました。

それから数年後、彼は再び僕の前に現れたのです。スーパーコンボなるものをひっさげて。

ちょうどゴム人間が流行り始めてきた時期でもあったので、僕はもう一度彼を持ちキャラにしてみました。

…が、いかんせん勝てん！！

伸びた腕が波動拳の餌食となったり、テレポートした先に（以下略）

僕は結局、エドモンド本田の道に走りました。
「無双じゃ〜〜い!!」

ナマステ〜（後書き）

オーソドックスにリユウとかケンもいいですね。

交通安全の標語（前書き）

世の中の標語は甘い。

交通安全の標語

横断歩道を渡っている時、こんなことが書かれた看板を目にしました。

『気をつけて 信号青でも 右左』

交通安全の標語です。

大変良いことを言っているのですが、どうもインパクト不足のせいか風景と同化してしまっています。

人の運命を変えるかもしれない標語。加減はするべきではありません。

人の目につきやすい、記憶に残りやすい、そんな標語を僕も少し考えてみました。

『飛び出しは 穏やかな日々 血に染める』
一つの過ちは一瞬にして全てを奪い去ります。

『絶望と 恐怖を呼び込む その一歩』
そこまで言われたら渡れません。

『右左 見てる間に 赤になる』
青が赤に変わってしまうくらい何度も確認しましょう。確実に遅刻です。

『運勢が 悪い日には 渡らない』
運も重要なファクターです。

『生活に 困っていても 飛び出すな』
当たり屋なんてしてはいけません。

『デートなら 急いで渡れ 赤信号』
渡って轢かれるがいい。

『ルール無視 そんなやつらは G o t o h e l l』
言い過ぎです。

『君の死を 喜ぶ奴が いるかもよ?』
だから迂闊な行動は避けましょう。

『ちょっと待て 保険にちゃんと 入ってる?』
保険会社の差し金。

『赤信号 渡るあんたは モテへんぞ
ほっとけ。』

『轢かれると 内臓出るよ？ 苦しいよ？』
生々しい。

『見えるだろ？ テメエの背後の 死神が』
無駄にカツコイイ。

『返り血を 吸って生まれた 赤信号』
知りたくはなかった。

『ほらごらん あの子のように なりたいか？』
人の振り見て我が振り直しましょう。

『バカヤロウ… あれほど待てと 言ったのに…』
間に合いませんでした。

『あゝやだやだ みんなに聞かれた 断末魔』
意外と恥ずかしいものです。

『嘘でしょう… 自分が地獄に 落ちるとは…』
信号無視で死んだら天国へ行けません。

もう思い付かない；

あと小説みたいな長さの標語も書いていたんですが、オチがよく分からなくなってしまったので削除しました…。

交通安全の標語（後書き）

後半は交通安全と関係なくなってる。

納豆レポート（前書き）

好きな物にはこだわろうぜ…！

納豆レポート

納豆、それは御飯に欠かせない究極の一品。

一度虜になれば、その中毒性はモルヒネをも上回ると言われている。

そんな危うさを秘めたブラウンパール——納豆を、より美味しく食べる上で重要になってくるのは、やはりその“混ぜ方”ではないでしょうか。

納豆の混ぜ方として広く知られる方法に、芸術家であり美食家でもある北大路魯山人きたおおじろさんじんが編み出した“魯山人納豆”というものがあります。

（魯山人納豆は彼の著書、『魯山人味道』に集録されています）

【魯山人納豆】

『準備』

納豆は小粒、藁苞わいぼに入ったものを使います。

器は向附むきつけと言われる底の深いものを用意するといいいでしょう。

それと愛情も忘れずに、ね （キモいわ

『手順』

まずは何も加えずにひたすら混ぜます。

（個人的には、この時に“完成した納豆を美味しくそうにかきこむ自分の姿”のイメージングをお勧めします。「内の如く、また外も」。
心に描いたものは鏡の如く現実反映されるのです）

←

←

200数十回くらいから糸がぶつぶつと切れるようになり、固く、手にかかる負担が大きくなります。

（発泡スチロールの納豆だと糸が切れません。無限地獄に突入すること請け合い）

←

←
少しずつ醤油を垂らし、さらに混ぜましょう。これを繰り返します。

（醤油を垂らすことにより、固い納豆がまた混ぜられるようになります）

←

←
薬味^{ネギ}と辛子（和ガラシ）を入れましょう。砂糖を加えてみてもいいかもしれません

——以上が北大路魯山人の魯山人納豆なのですが、多くのインターネットサイトでは、

“何も加えず305回かき回し、そのあと醤油を入れて更に119回、合計424回かき回す”

と、細かい数字まで表記されています。

これは、NHK番組『ためしてガッテン』の放送による影響で、この番組では魯山人の孫弟子に当たる人物に納豆の練り方を再現してもらい、番組独自にそのかき混ぜた回数を数えて紹介していたそうです。

（魯山人本人は、その性格上いちいち回数を数えたりはしなかったと思われます）

ところで何故、上記のような混ぜ方をすると納豆が美味しくなるのでしょうか？

まず醬油を後から入れるという点ですが、これは水分過多になって“粘り”が出なくなることを回避するためです。

そうなるは今度は、「何故粘りが必要なのか？」という話になりますが、納豆のネバネバ成分の元となっているのは“ムチン”と“ポリグルタミン酸”というアミノ酸（旨味成分）の一種で、ポリグルタミン酸とは、「納豆菌が大豆のタンパク質と糖質から作ったグルタミン酸とアミノ酸が繋がった状態」を言います。

強い粘り気はそのポリグルタミン酸が約三千個繋がっているために生じるのですが、その粘る状態では納豆はあまり美味しくないなので糸を切ってやらねばなりません。

その糸を切るという作業により、ポリグルタミン酸をグルタミン酸という旨味成分に変えてやる事ができるのです。つまり納豆を美味しくするには、一度糸を引かせて、その糸を断ち切ってやる必要があるわけです。

これらのメカニズムから、魯山人納豆が納豆のポテンシャルを引き出す上で大変理にかなった方法であることが分かります。

藁苞の納豆が使われていたのも、糸が切れやすく、グルタミン酸が出やすいからなんです。きっと。

（余談ですが、親が一度、藁苞の納豆を買ってきてくれたことがあります。しかしそれは、納豆自体はビニールに包まれており、藁はただの見かけ倒しというまがい物でした。

このような“なんちゃって藁苞”が出回っている事に、私は深い悲しみとただならぬ憤りを感じております）

——以上で納豆レポートを終了します。

食の道は奥が深い。納豆だけにこれからも粘り強く（あゝ、やっち
やった…）探究していこうと思います。

納豆レポート（後書き）

長々と申し訳ありませんでした。

別（前書き）

俺達を縛っているのは、俺達自身なんだよ！

別

相互に悪影響を及ぼす、歪んだ関係というものが世の中に溢れかえっている。

自分にそういった繋がりがあり、先行きに不安を覚えるのなら、すぐにでもそういった関係を断ち切るべきだ。

その際芽生える罪悪感とは、依存対象を失いたくないという弱い心が生み出した偽りの意識。

本当の罪は、関係の維持に固執し、二人分の人生を殺すことじゃないだろうか。

親兄弟、友人、恋人、誰とであろうと狂った付き合いからは抜け出さなければならぬ。

自分と、相手のために。

今いる泥沼から抜け出し、日の当たる場所で空を見上げる清らかな人間の元で浄化され、そうして初めて他人と向き合える。本当の自分で。

自分のような病んだ人間は、特にこういった事を留意して生きていく必要があるだろう。

もう、誰も怨まなくていいように…。

別（後書き）

人は誰かと一緒にいることで、強くなるだけでなく弱くなることもあるのです。

過去の脅威（前書き）

過去に…囚われるな！

過去の脅威

過去を生きる人にろくな人生は用意されていない。

分かっているのに、どうしても、過去に頭を支配されてしまう事があります。

「あいつさえ存在しなければ」「あんな出来事がなければ」自分は今は180°違った人格になっていて、もっと面白おかしい日々を過ごしていたのでは。そんなふうに考えてしまいます。

一日一日は選択肢の連続で成り立っており、その決断は過去の経験に大きく委ねられている。

良い経験はもちろん、悪い経験も現在の教訓に出来ているのなら選択には大いに役立ちます。

問題は生きる上で障害にしかない、トラウマとなっている過去。

一度これに縛られると、人は望まぬ選択を繰り返す事になってしまいます。

ある道で石に躓いて転ぶ。その出来事が恐怖として心に刻まれる。すると似たような道を通り掛かるたび、自らが作り出した幻覚の石に転ぶようになってしまう。

そんな事を繰り返すうちに幻覚はよりリアルさを増し、良からぬ確信を深めていくという悪循環に陥る。

なんとも滑稽な話です。

過去は過去。自ら転ぶ必要などないのに…。

トラウマを乗り越えるにはどうしたらいいんでしょう。

恐れるものなど存在しないだと、全ては過去なのだとか己に言い聞かせ、苦手な事にも果敢に挑めばいいんでしょうか。

良からぬ記憶が元凶なら、それを良い記憶に書き換えてしまおうというのも手かもしれません。

未来から襲い掛かってくるの過去。それを潰していく事こそが、理想の自分を手にする事に繋がるのではないのでしょうか。

…という勝手な考え。

過去の脅威（後書き）

前だけ向いていこう。

アソコウとかナマコとか最初に食べた人は凄いのと思う(前書き)

いや、本当に大したもんだ！

アンコウとかナマコとか最初に食べた人は凄いと思う

ウニ「俺食うの！？ トゲトゲだぜよ！？」

（まさか割られて中身えぐられるとは思ってないはず）

イソギンチャク「よくこんな触手ワサワサのおいどんを食う気になったでござすな…」

（磯巾着を食べる県もあるそうですね）

海老「僕…ダンゴムシの仲間なんすけど…」

（海老は大の苦手です）

ナマコ「俺なんかウ○コやないか！」

（口に入れていいものには見えません）

イナゴ「カブトムシに生まれたかったわ」

（タンパク質が豊富らしいですね）

ごぼう「お前ら棒食うんか！」

（あれ棒ですよね…？）

ブロッコリー「お前ら木食うんか！」

（あれ木ですよね…？）

ピータン「よくもまあ、こんな私に萌えキャラみたいな名前つけて
食えたもんですわ」

（名前かわいいですよね）

子持ちししやも「まさに鬼畜の所業！」

（女子供も容赦なく）

ガチヨウ「最初から私の肝臓が目当てだったのね!!」

（フォアグラの数だけ涙がある）

アンコウ「最初に食った奴、絶対罰ゲームやな」

（深海魚はもれなく恐い）

ウナギ「人間に食われんように、蛇っぽく進化したのになあ……」

（ニョロニョロしてて気持ち悪いのに人気の食材）

海亀「涙ながらの産卵で人々の感動を誘ったというのにこの仕打ち」

（痛くて泣いてるわけじゃないしね）

トリュフ「ウン○やないか!!」

（ナマコと“○”の位置を統一してほしかった）

カエル「鳥肉に似てる…か。へっ、向こうを基準にされちゃった。こいつあく傑作だぜ！」

（「あつ、鳥肉みたい」って台詞、下手物を食べる番組でよく耳にします）

フグ「初戦は引き分けだったな」

（たぶん最初に食べた人は亡くなったと思う）

カンガルー「おいおい、俺を食う気か人間共？ あゝあ、有袋だけにてつきり優待されてんのかと思…ギィエィエィエィエィエィエィ！
！！！！！！（死）」

(カンガルーのサラミを食べたことがあります)

ハリセンボン「ヒイイ！！ お助けください！！ 針が千本あると嘘ついたことは謝りますから！！」
 つて、そもそもこの名前はあんたらがつけたんじゃないか！！
 逆ギレは勘弁してくれよ！！」

（もう十年以上前の話ですが、目覚ましテレビでハリセンボンの針を数えてました。ありや千本もないです）

犬猫「ふむ、まあ治安なども関係してるんじゃない」

（ワンニヤンを食べちゃう国もあるんですよ…）

蜂の子「ま… まって！ ボクはおとなになつたら、お空を自由に
びまわって、お花さんたちからおいしい花ふんをたくさんもらっ…

ギヤアアアアアアア！！！！！！！！！（死）」

（一匹だけ食べたことがあります）

人間「お、お前ら見境無しか！！」

（カニバル）

食材達が“初めて人間に食べらる時の気持ち”を台詞にしてみると、たぶんこうなるでしょう。

世の中には様々な食材がありますが、その多くは「これ最初に食おうと思った人すげーな！」と感じてしまうようなものばかりだと思うんです。

仮にそれが自分にとって馴染み深い食べ物だとしても、冷静に考えると「これは本当に食べていいものなのだろうか？」という不安を抱いてしまったりします。（そういう時は「みんなが食べてるから自分も」と、自分に言い聞かせて食べるようにしてます）

そしてなにより、“食べられる側”。彼らの受けた衝撃は相当なものだったのではないだろうか。

「自分には関係ない」

「自分だけは人間に食べられない」

たいていの食材はそう考えていたはずです。中には護身用の武器を持った者もいるくらいですから。

……でも甘かった。

人間の食への探求心、いや、生への執着心は、彼らの想像を上回るものだった。

彼らの楽観的思考やプライドは、その身と共に人間の歯で砕かれていきました。

食材の数だけ初めて食べた人間がいる…。

ちよつと恐いけど、自分もいつか初めての人間になつてみたいです。といつても、もうほとんどのものは食べ尽くされてるかな；

UMAでも食うか！

アソコウとかナマコとか最初に食べた人は凄いのと思う（後書き）

友達がティッシュ食ってました。

H A P P Y ? (前書き)

幸せは…決めるもの？

H A P P Y ?

今この瞬間に幸せを見いだせない者は、どんなに大きな物を手に入れてもその満足は長続きしない…。

そうかもしれませんが。

「あれがなきゃ幸せになれない」という考えでは、例えそれが得られたとしても、相対的にまた次の物を求めるという無限ループに突入してしまうことでしょう。

今自分には、悩んだ時にいつも長い愚痴を聞いてくれる人がいるし、遊びに誘ってくれる人もいる。

これ…実は超絶的にありがたいことなのかもしれない。

こんな状況にありながら「自分は不幸だ」とか言ったら、それは周りの人達に対して失礼だし、自分以外の人間を自分の欲求を満たす道具としてしか見ていないことになるのかもしれませんが（それは言い過ぎ）。

しかし、それでも欲望は沸き上がります。人間はタンパク質と欲望で出来てますからねw

だからこう考えるといいんじゃないでしょうか。

「私は今幸せです。満たされています。でももっと幸せになろうと思います。そうすれば周りの人達ももっと幸せになれるからです」

そしてこれを応用すると…

←

「イイイイイヤッホオオオオオイ！ 俺はチヨ〜〜かつこええべ
！ エクセレエエント だけでも〜つとイケイケになるぜよん
♪ 俺がイケイケになりや周り奴らの目の保養になるかんね〜」
かつこよくなりたい場合

うつとうしいなコイツ！！

とりあえずその似合わんグラサンを外せ！！

とにかく、今の自分を認めてあげることが大事ですね

HAPPY? (後書き)

ものは考えようですな。

素でいきませう(前書き)

やっぱり素が一番だね

素でいませう

最近、なるべく有りのままにいるよう心掛けとります（本当になるべく）。

虚栄心や必要以上の気遣いを排除して、「世界は素の自分もちゃんと受け入れてくれる」という気持ちで生活するんです。

そのおかげか、苦手な人が近くにいるても前ほど緊張しなくなったし、前は目上の人に対してガツガチの敬語を使っていたのが、今ではポロリとタメ口が出てしまうくらい軽い感じになりました（そりゃあかんがな）。

この調子でポジティブ野郎になればいいんだけど……どうだろ。でも前向きにならなきゃ願いが叶わないのさ！

【カオス・猫熊劇場！】

熊

「死にたいクマ」

猫

「いきなりネガティブなこと言うんじゃないキャット。一体何があったキャット」

熊

「怖いんだクマ！ 毎日毎日、怖くてたまらないんだクマ！ 平気なフリしてるけど本当は夜中一人で震えてるクマ！！ ていうか君の語尾、“キヤット”なんだね…」

猫

「文句あるかキヤット？」

熊

「いや、猫キャラって大体“ニャー”だから、ちょっとカッコイイなあって…」

猫

「だったらお前も語尾にベアーを付ければいいキヤット」

熊

「わ、分かった、そうしてみるベアー」

猫

「……………」

熊

「……………」

猫

「……………どう？」

熊

「…なんか訛ってるみたいで嫌クマ。クマのままでいくクマ」

猫

「そうか、まあいいキヤット。それで、何がそんなに怖いキヤット？」

熊

「……この世界から……人の輪から……弾き出されるんじゃないか。そんな恐怖に苛まれてるんだクマ」

猫

（うわっ、暗い奴だキヤット）

熊

「だからいつも鮭を捕る時のように神経を研ぎ澄ませ、周りへの対応に気を使ってるクマ」

猫

（鮭を捕る時のようにって……。むりやり熊キャラであることを強調してるキヤットね）

熊

「でも何と言うか……そう、自分が自分じゃないようなんだクマ！自分の言動に自分の意思を感じられないんだクマ！！その嘘っぽさが自分の自信を損なわせ、そして失った自信をまた偽りの自分でカバーしようとするんだクマ！！なんたる悪循環だグマ、アア！！ハア、ハア、ハア……」

猫

「お、落ち着けキヤット。つまり素の自分を出せていないってことキヤット？」

熊

「そうなんだクマ。いつも“この言い方は角が立つかな”とか考えちゃって、思うように発言できなかつたりするんだクマ。酷い時は何も言えなくなるクマ。それが相手のためならまだしも、どうやら自分のためのようなんだクマ。それが気持ち悪くて気持ち悪くてしかたがないクマ。熊だけにくまっ…」

猫

「おっと、それは言わせないキャット！」

熊

「うぬう…」

猫

「お前は考え過ぎキャット。人の言動なんて突き詰めれば全て利己的。善も偽善もありはしないキャット。いちいち気にしてたら円形脱毛症になってしまうキャットよ」

熊

「もうなってるクマ」

猫

「うわっ、こりゃ酷いキャット！俺だったら自殺してるキャット！よく生きてられるキャットね！」

熊

（酷いのはあんただクマ）

猫

「とにかく、もつと自分に正直に生きることだキャット。それが結果的には周りのためになるキャット」

熊

「うーん、そう言うのは簡単クマ…。実際、中々そんなふうには…」

猫

「確か、本当に好きなものを見つけてそれに夢中になると、人は良い方向に変われるとか。お前が好きなものは…ハチミツ?」

熊

「ハチミツはベトベトするから嫌いクマ。体毛がカピカピになって最悪マ」

猫

「へえ、熊はみんなハチミツが好きなんだと思ってたキャット」

熊

「それは偏見クマ。世の中には血を嫌う殺し屋もいるクマよ…」

猫

「わざわざかつこよく例えるなキャット。キムチが嫌いな韓国人とか、カレーが嫌いなインド人とか、他に言いようはあっただろキャット」

熊

「うぬう…」

猫

「とにかく、自分が一番輝けるものを探してみるんだキャット。今よりもずっと強くなれるキャット」

熊

「うん、分かったクマ。あゝあ、あいつらさえいなければ、こんなに苦労することなかったのにクマ」

猫

「あいつら？」

熊

「嫌な奴らがいたんクマよ。あいつらと関わったから、僕はこんな性格になっちゃったんだクマ」

猫

「熊よ、お前を弱くしたのはその嫌な奴らじゃないキャット。お前は元々弱かった。その弱さが嫌な奴らを生み出したんだキャット」

熊

「そつなのかクマ…？　そういうふうには考えたことなかったクマ」

猫

「どっちにしてもそう割り切らないと、いつまでも過去に捕われたままだキャット。先々に起こる不幸はいつでも過去が絡んでるキャット。上手く処理しなきゃならんキャット。ところでその嫌な奴らってどんな奴らだったキャット？」

熊

「えっと…蛙三兄弟って奴らなんだけど…」

蛙×3

「ヒャッハアアア！！俺達を呼んだかゴルバチヨフ！！　ブツ殺されてえのかゴルバチヨフ！！」

熊

「出たああ！　相変わらず凄い語尾だクマ！」

猫

「蛙らしさ皆無キヤツト」

蛙×4

「ボケ熊、久しぶりだなあ！　またテメエをいじりにきたぜゴルバチヨフ！！」

熊

「くう…またあの悲劇が繰り返されるクマ…。どうすればいいクマ…。さりげなく一匹増えてるクマ…」

猫

「もつさあ、踏めばいいキヤツト」

熊

「！？」

猫

「こいつら小さいキヤツト。さつさと踏んで終わらせるキヤツト」

熊

「い…いいのかクマ！？　殺人になるんじゃ…」

猫

「人じゃないから大丈夫キヤット。こういつ形で過去と決別するの
も有りキヤット」

蛙×5

「さあいくぞゴルバチヨフ!!」

熊

「こ、こいつら目を離すとどんどん増えていくクマ!!」

猫

「グズグズしている暇は無いキヤット! さあやるぞキヤット!」

蛙×6

「何だデメエら、俺達を相手にやるってのかぁゴルバチヨフ!?!」

猫

「タイミングを合わせるキヤット!」

熊

「62秒でケリをつけるクマ!」

蛙×530000

「かかれ野郎共オオオオオ!!!!!!」

猫熊

「猫熊ユニゾンアタック!!」

ブチブチブチブチブチブチブチブチブチブチブチブチブチブチ

ブチブチブチブチブチブチブチブチブチ！！！！

猫

「ハア…ハア……時には…ケモノになることも必要キャット……」

熊

「わ…分かったクマ…。もっとアグレッシブに生きていくクマ……」

こうして一歩、幸せに近づいた熊君でした。

素でいきませう（後書き）

自分を飾ったりして、10の実力を20に見せようとしたりすると、人はどんどん苦しくなるそうです。

だから出来る限り素で人生を歩んでいきたいですね。

カース（前書き）

俺たちは呪いによってその力を制御されていたんだ……！

カース

ある野球選手が、
「子供の頃から“野球選手になれると思って”野球をしていた」と言っていた。

願望ではなく、確信：

彼がプロになるのは決まっていたことだったのかもしれない。

きつと環境が良かったんだと思う。

野球一家だったとか強い野球部にいたとか、そういうことなく
て、

悪い暗示・洗脳を行う大人がいない環境で育ったんじゃないだろうか。

本当は不可能なんてありはしない。
ただ制限をかけられてるだけなんだ。

「あれは才能がなきゃ駄目だ」

「現実を見る」

「お前には無理だ」

「そんなことをしていたら人生が無駄になるぞ」

心ない大人の言葉に、叶うはずの夢を奪われた子供達のなんと多いことか。

一番許せないのは…

「お前は父さんの息子だからな。絶対ハゲるぞ」

こっぴつこつと言う大人。

カース（後書き）

俺だってもしかしたら総理大臣になってたかもしれないんだ。

全ては創造主によって組まれたことなのか…？（前書き）

これは正直辛かった。

全ては創造主によって仕組みられたことなのか…？

最近、携帯電話がおかしい。

新着メールが、古いメールよりも下に表示されたりするので探すのが大変。

いや、それはまだいいんだけど…。

一番ショッキングだったのは、メモとして使っていたメールの下書き約150件が、29件にまで減ってしまっていたこと。

溜めに溜めたアイディアの数々がこの世から消えてしまったんだよ
ー（TT）

バックアップをとってたやつはいいんだけど、それ以外は…

携帯電話って、数年経つとわざと壊れるように作られてるんじゃないかな。
かるうか。

バッテリーも、本当は100年くらいもつんだけど、わざと寿命を設定してあるんだと思う。

電球とかも本当は半永久的にもつんだけど、わざと切れるように作られてるって聞いた覚えがあるし（ゝゝ、；）

全ては、買い替えさせるために…

実際どうなんだろう。

全ては創造主によって組まれたことなのか…？（後書き）

許さんぞ、ソフトバンクめ。

レズンデートル(前書き)

小説です。

レゾンデートル

“ご主人様に効率良くエネルギーを摂取してもらいたい”
私はその一心で外の世界へ飛び出してきました。

そんな私を迎えてくれたのは数十人の仲間達。
彼らは私が出てくるずっと前からご主人様のために働いていたそうです。

仲間達は皆、二人一組で仕事を熟していました。
それを見て「自分も早く誰かと組まなくては」という焦りを抱きましたが、私にできることは自分と協力してくれる者が現れるのを待ち続けることだけ。

私は何日も何日も、光から最も遠ざけられた担当区域で、孤独な時間を過ごしました。

そんなある日、仲間の一人が私にこんなことを言いました。
「お前の相方なら、お前が出てくるずっと前に追放されたよ。お前をずっと待ってたんだがなあ。どうやらその存在をマスターに否定されちゃったらしい」

なんということでしょう。私とペアになるはずだった者は、既にご主人様の意向で持ち場を外されていたのです。

相方の存在が否定された。
それは私の存在が否定されたのと同じこと。

案の定、数日後には私も持ち場から離されてしまいました。

「いい様だな」

透明の袋に入れられた私を見遣り、御主人様は笑みを浮かべます。

「お前にはずいぶん苦しめられたよ」

苦しめた？ 私が、御主人様を？ そんな…

「親を知らぬ者、己の主人に災いを贖す。昔から言われていることだ」

もう…やめてください。

せめて…せめて最後に……

「お前は…」

私に…

「必要の無い存在だ」

存在…意義を…

「さらばだ、“親知らず”よ」

言いながら、御主人様はその手で私をごみ箱に押し込みました。

…というわけで、

最近、親知らずを二本抜きました。

すごく立派な歯だったので、「これは本当は抜いてはいけない歯なのではないか？」と心配になったりも…。

> i 7 0 2 8 — 2 1 0 <

レゾンデートル（後書き）

抜くときの“ミシミシ”という音が嫌ですね。
必要の無い歯とはいえ、自分の体が破壊されるのは恐怖です。

カッコイイ台詞（前書き）

読んでくださった方も、是非一度使ってみてください。

カッコイイ台詞

俺は心が弱い…

だから日々、些細なことでもたくさん傷ついている。

そんなMYロントリーハートへの負担を少しでも軽減するため、

俺は日常生活に、現実ではあまり使われないようなイケてる台詞を積極的に取り入れ、自分を慰めたり、その場をごまかしたりするようになっている…。

“楽しみにとっておいたプリンを家族に食べられ、しかも全然反省していない態度で「はいはい、新しいプリン買ってくればいいんですよ」と言われた時に使えそうなカッコイイ台詞”

『アイツじゃなきゃ…駄目なんだよ!』

(恋人を想うように)

“鍋パーティーの時、一人だけ会話に参加できず、ただひたすらア
クを取る作業に没頭してる自分を慰めるのに使えそうなカッコイイ
台詞”

『みんなの笑顔を守るため、俺は一人、アク（悪）に立ち向かう』
（誰にも聞かれないようにぼそっと）

“ やたら自分だけ蚊に刺される時に使えそうなカッコイイ台詞 ”

「フッフッフ、好きなだけ喰らうがよいわ…。この血が貴様ら一族を繁栄させる糧となる。つまり、この我こそが貴様らの主、モスキート王となるのだ!!」

（長いし意味分からん）

“ 夜中友人に呼び出され、「最近髪が薄くなってきたんだ」という相談を受けた時の気まずい空気を救えそうなカッコイイ台詞 ”

『見て、綺麗な星空だよ。でもかわいそうな星達だなあ。え？ 何故かって？ だって地上には君という最高に輝いてる星が…グハアッ!!』

（そりゃ殴られるわな）

“ 仕事中、嫌なオジサンに注意された時に使えそうなカッコイイ台詞 ”

『私の美しさに嫉妬ですか…。フツ、見苦しいですよ』

（「オメー不細工だろ」とか言われるので口に出してはなりません）

“ いい歳して、ダンゴムシを手の平でつついて丸くさせる遊びに
何時間もハマッてしまい、なんだか恥ずかしくなってきた時にとり
あえず言っておくとよさそうなカッコイイ台詞”

『貴様は私の手の平の上で遊ばれていたのだよ』

（黒幕現る！）

“ 電車に乗り遅れた時に言つとよさそうなカッコイイ台詞”

『また、俺一人だけ取り残されちゃったな…』

（時代から取り残されたかのように）

“ バイト先とかのおばちゃんに「お兄ちゃん、カッコイイね」（社
交辞令）」とか心にも無いことを言われた時に言つと黙らせること
ができそうなカッコイイ台詞”

『もつ…あんだでいいよ』

（自分を認めない社会にうんざりし、半ばヤケになつて荒れた男を演出）

“母の日にカーネーションを買いに行き、花屋の店員に「母の日のプレゼントですか？」と聞かれて恥ずかしくなった時に言つとよさそうなカッコイイ台詞”

『腹減つたから食うんだよ』

（ワイルド！）

“下痢になつてしまつた時に言つとよさそうなカッコイイ台詞”

『母さんは、こんなに苦しい思いをして俺を産んでくれたんだな…』

（かつこよくない。そして下痢と一緒にすんな）

“カップ焼きそばのお湯を捨てる時に、誤つて麺までぶちまけてしまった時に言つとよさそうなカッコイイ台詞”

『……………エコ』

（今の時代、とりあえずエコと言つておけば何でも済まされます。

エコエコうるさい世の中ですが、どうせ自分一人の力ではブームを終わらせることなどできないので、自分の都合のいいように便乗してしましましょう。例えば憎い相手をついカツとなって殺してしまった時は「これで人間一人分の二酸化炭素が減った……エコだ」というように）

“頬張った焼肉が熱く、ついつい口から出してしまった時にごまかせそうなカツコイイ台詞”

『駄目だ…できない……こいつを食うなんて俺にはできないよ！
だつてこいつ…かわいいそんな奴なんだよ！ 想像してみろよ…。あ
る晴れた昼下がり…市場へ続く道……荷馬車がゴトゴト、子牛を乗
せてゆく…。かわいい子牛、売られていくよ！ 悲しい瞳で見えてい
るよ！ ドナドナドーナドーナ、子牛を乗せて！ ドナドナドーナ
ドーナ、荷馬車が揺れる！！ 分かったかコラア！！！！』
（カラオケでよく歌います）

“銀行強盗に「手を挙げろ」と言われ、しかたなく手を挙げた時に
言うときさそうなカツコイイ台詞”

『頼む…ほんの少しずつでいいんだ…。地球のみんな、オラに元氣
を分けてくれ…！』

（運よく元氣が集まったら、それを強盗にぶつけて一躍ヒーローに
！）

“皮から飛び出した枝豆が、近くの人に当たってしまった時に言う
とよさそうなカッコイイ台詞”

『真の殺し屋つてのは得物を選ばねえのさ』

(えっと…つまり…飛び出した枝豆を弾丸に例えてるわけで……)

“電車の中で「この人痴漢です」と言われ、必死に否定するが信じ
てもらえない時に言うと言手がビックリしそうなカッコイイ台詞”

『それでもおボオクはあやってないヤイヤ!』

(罪と罰) 神様のアリバイ / A c c i d B l a c k C h e r r
y)

“死にたくなかった時に言う、もうちょっと生きてみようかと思え
そうなカッコイイ台詞”

『“向こう”へ行くのは、自分がいなくなって悲しむ奴ができてか
らでも遅くはないだろ?』

(いやいや、いますって! 今でも何人かは悲しんでくれますって

！ た、たぶん…！
）

うん、ほぼ全部カッコ悪いですね…

カッコイイ台詞（後書き）

使えないか^^；

ギュギュギュギュギューン

「株式会社ギュギュギュギューン」というユニークな名前の会社がある。絶対に忘れられなさそうな強烈なインパクトだが、「そつういえば“ギュ”は何回重ねればいいんだっけ？」と混乱しそうな気もする。念のため確認すると、「ギュ」を5回続けた後に「イン」だ。

英名は「G y u G y u G y u G y u G y u e e e n I n c .」。Webサイト「ギューン モータースポーツ情報」を運営している。設立は2006年10月で、企業理念は「『Give & amp ; Give & amp ; Give & amp ; Give & amp ; Give』の精神をモットーに、モータースポーツの発展に貢献する」ことだ。

同社の大野省三社長のTwitterによると、社名も理念も真面目に考えたもの。法務局は平然と登記を受け付けてくれたという。

では、そんな株式会社ギュギュギュギューンでちょっとした妄想を… ←

【娘さんをください】

彼女の父

「君かね、うちの娘と交際しているのは」

保徳

「はい、林保徳と言います」

彼女の父

「林君、仕事は何をしているんだね？」

保徳

「株式会社ギユギユギユギユギユイーンに勤めています」

彼女の父

「は？」

保徳

「ですから、ギユギユギユギユギユイーンに……」

彼女の父

「帰りましたえ……」

保徳

「えっ……あ、あの、娘さんを僕に……」

彼女の父

「帰りましたえ……！」

【面接】

面接管

「では、我社への志望動機をお聞かせてください」

入社希望者

「空前絶後の究極ドリルを開発したく、御社を希望しました」

面接管

「ええ、確かにうちはギュギュギュギュイーンだけど、そういうのは扱ってないんだよねえ……」

入社希望者

「えー！ ドリルだけに空回りだったわけですかー！」

面接管

「なんかもう、色んな意味で不採用だねえ」

【次期社長】

社長令嬢

「ねえ、婚約破棄ってどういうことなの!？」

婚約者の男性

「ごめん……やっぱり株式会社ギュギュギュイーンの次期社長になるというのは……」

社長令嬢

「貴方が社長になったら社名を変えればいいじゃない」

婚約者の男性

「あ、そつかあ！ んじゃ結婚しよー！」

【いじめ】

いじめっ子

「やゝい！ お前の父ちゃんギュギュギュギュイーン！」

いじめられっ子

「うわゝん！ 父親がギュギュギュギュイーン社員だと息子である僕は無条件で虐められるよゝん！」

【引越し】

青年

「あの…このアパートの家賃、いくらなんでも安過ぎませんか？」

不動産屋

「ああ、実はねえ、このアパートの裏には…」

青年

「まさか……墓地があるとか？」

不動産屋

「いえ、株式会社ギュギュギュ…」

青年

「他の物件紹介してください!!」

【法務局】

法務局の人間 A

「この前すつげえ変な社名を登録しちゃってさあ」

法務局の人間 B

「へえ、どんな名前よ？」

法務局の人間 A

「株式会社ギュギュギュギュイーン」

法務局の人間 B

「アハハ！　なんだそりゃ！」

法務局の人間 A

「俺の兄貴がその会社に勤め始めたんだけど、社名が変過ぎるせいで彼女の父親と険悪になっちまってさあ」

法務局の人間 B

「な、何故…」

法務局の人間 A

「弟はドリルの会社と間違えて面接受けに行くし、従兄弟は社長令嬢と結婚のことでもめるし、あの会社に勤めてる友達の息子はいじ

めに合うし、知り合いの不動産屋は入居者が決まらないって嘆くし、どれもこれも全部ギュギュギュギュインという名前が悪いんだよ」

法務局の人間 B

「その名前がそんなに多くの人に悪影響を及ぼしているとは……。つていうかお前の周りにはどれだけギュギュギュギュインに関わってんだよ!!」

【その名は永久とわに……】

2XXX年、地球は核の炎に包まれ、長い冬が訪れた……。だが、某株式会社に備えられた地下シェルターによつて、権力者はもちろん、多くの市民がその命を繋ぎとめたのだった。

避難者 A

「まさか、一介の株式会社に核を防ぎきるようなシェルターが備わっているとはな……」

避難者 B

「驚きだよなあ。ところでこの会社、何て名前だっけ？」

避難者 C

「確か……ギュギュギュギュイン……株式会社ギュギュギュギュインだ!」

避難者 D

「ギュ……ギュギュギュギュイン……」

避難者E

「株式会社ギュギュギュギュイーンが…俺達を護ってくれたのか……」

避難者F

「素晴らしい……なんて素晴らしい会社なんだ……！！ ギュギュギュギュイーン……」

避難者達

「バンザアアアイ！！ バンザアアアイ！！ ギュギュギュギュイーン、バンザアアアイ！！」

シエルター内で繰り返される万歳。

その歓喜の光景を二人の男が少し離れた場所で眺めていた。

天皇

「多くの命を救ったこの会社、ギュギュギュギュイーンの名は未来永劫語り継がれることでしょう。そして社長さん、貴方の名も」

大野社長

「え？ うちの会社隣りですけど」

早!!

「早!!」というツッコミがしっくりくる台詞集。

「確か、二歳の頃だったかな…。俺が絶望というものを知ったのは」

「昨日あんたが可愛いと言って頭を撫でた赤ん坊、そいつが成長したのがこの俺だ!」

「怒りのボルテージがMAXに達した時、俺の弾いた鼻糞は音速を超える!!」

「ごちそうさまアアアムハングリー!」

「おっ、やっとイッたか…。俺様はすでに5回イッているぞ!!」

「こちら、3分寝かせたワインです」

「おお、ウルトラマンが来てくれた!!
…が、カラータイマーが

既に!!」

「確か、二歳の頃だったかなあ…。女の味を知ったのは」

「かゝめゝ波――!!」

「にいちがに、ににんがし、にさんがろく、くくはちじゅういち」

「よく寝たアアアイムスリーピー!」

「先月生まれた課長の娘さん、すでにボインだそうです」

「なんか気分良くなってきたなアアアイムアングリー!!」

「今ここに、新たな星が生まれ、散った…」

「もう、ネタ切れです」

長老の言葉

> i 1 4 1 1 0 — 2 1 0 <

人生なんてただのゲームなんじゃ

超リアルなゲームなんじゃ

難易度が高いならオプションでルール変更したればええんじゃ

軽い気持ちでプレイしておりゃええんじゃ

遊びでプレイしてる奴ほど上手いくんじゃ

真剣になり過ぎる奴ほどネトゲ廃人（鬱）みたいになるんじゃ

この世界は苦しむために存在するわけではないんじゃ

ただひたすら楽しむためだけに存在するんじゃ

さあ選ぶんじゃ

無限の選択肢の中から次なる行動を自由気ままに選ぶのじゃ！！

一人称で悶々

ネット上も含め、初めて接触する相手には敬語を使うのが普通だと思います。そしてその時の一人称は、男なら“僕”を使うのが当然なのではないでしょうか。（会社とかでは私かな）

しかし何度か相手とやり取りをしているうちに、敬語はいいとして段々“僕”と口にするのが気持ち悪く感じられるようになってくるのです。それはさながら、蕁麻疹に似た何かが身体を蝕んでいく感覚でしょうか。

だったら“僕”をやめればいいだろ、という話なんです、いきなりやめるといふのは中々勇気がいるもの。

「H A H A H A！ んゝなこと気にすんなよう、ブラザー！！」
…とか言われれば、その場で“僕”をやめられるのですが。（こんな喋り方の人とは付き合いませんが；）

どうしても“僕”を使いたくない、しかし“俺”を使うのも気が引ける、という時は、間をとって“拙者”を用いることがあります。

「武士か？」

と直にツッコまれたことはまだありませんが、少なからず不信感を与えてしまったことは確かでしょう。決して憑依されていたわけではありません。

この場を借りてお詫び申し上げます。

こういうのって、よりナチュラルに人と接したいという心の顕れなのかもしれませんね。

内向的な自分にとって、いい傾向と言えるかもしれません。

お土産

不老柿…

ああ不老柿…

不老と言っておきながら干物になつてる不老柿…

シナモンがやたらキツイよね不老柿…

でそんな君が大好きさ不老柿…

> i 1 4 1 1 1 — 2 1 0 <

家族の誰かが、どこかのお土産を買いました。

包装を破った瞬間「ボロボロやないかい！」とツッコんだんですが、
どうやらこの饅頭、干し柿を模しているようです。

このボロボロの状態が完成だとしたら、恐らく検品とかをする必要
はないでしょう。

今回は、意外な形で人員削減を行う工場のお話でした > (——) <

神に愛されてるヒト

っていますよね。

最初から多くのモノを持つてる上、それを元手にさらに私腹を肥やすヒト達が。

中には故意に他人を傷つける権利を持つてるヒトもいる。何故か許される。因果応報もクソもない。

ただそこにいるだけで非難される人もいるというのに。

何も持つてない人は持つてるフリをする。これがまた醜い。どんどん自分が嫌になる。

やつと得たモノに対しても不満ばかり。そしてまた失っていく。いくらあがいても、何かの力がゼロに引き戻そうとする。

溜まっていくのは破壊衝動ばかり。でも破壊する勇気も持つてない。

U F J

ふと、U F J 銀行の“U F J”って何の略なんだろうという疑問が浮上しました。

調べるよりも自分で考えた方が楽しい。下手な鉄砲も数打ちゃ当たる。

ということで、あいうえお作文（A B C 作文？）をやってみます。

U ウエンツって

F 普通に

J ジャパニーズだよな

（そうだね）

U 梅干しってさ

F フルーツじゃね？

J ジャンルのに

（あれ果物ですよね…？）

U うんこ

F ふん

J じゃった

（えんがちよ！）

U ウ

F フフフフ…

J じゃんじゃん食べなさい

(夫を生活習慣病にする女)

U うるさいなあ…

F ファクトリーが近所にできたせいで

J 地獄だぜここ最近

(騒音トラブル)

U うゝん

F ファンのマナーが悪いぜ

J J a n n e D a A r c

(ファンならマナーは守りましょう)

U うかつだった

F 富士山に

J ジャンクがこんなにも…

(富士山が世界遺産に指定されないのは大量に投棄されたゴミのせいです)

U うわ!

F ふと指を擦り合わせてみたら

J じゃんじゃん粉が!!

（ビブーティー）

U うう…

F 不安が大きくなりすぎて

J 自害してしまいそうだ

（不安なんてものは過去のデータを元にして割り出した想像上の未来にしか存在しない。“今この瞬間”を意識し続けるんだ。一切の苦しみが無いことに気付く！！）

U うーん

F Fantasiaがミスで2曲になってるよ

J Janne Da Arc

（イントロがインストになっちゃってます）

U 丑の刻ってさあ

F 普通は寝てる

J 時間だよな

（釘打ってる時間じゃないよね）

U 瓜

F ふたつだな

J ジャムおじさんとお前

（失礼だぞお前、そもそも俺はごはん派だ！！）

U 嘘を

F ふんだんに盛り込んだ
J 自慢話

(そこまでして自尊心を…)

U アルティメット

F ファイナル

J ジャイアン 本当はGです

(勝ち目ゼロ)

U ウコン味の

F ファンタだって?

J 冗談じゃないよ!!

(コカ・コーラの大冒険)

U ユニバーサル

F ファイティング

J ジャパン

(S N Kの新作。世界各国の強豪達が日本の大阪に集う!!)

U 運命に導かれ

F 二人は出会い

J ジャンキーとなった

(ロマンチックでもなんでもない結末。恋人同士で薬をやるケースがあります)

U うそやん！

F ファイナルファンタジーの

J 14作目が出るんかいな！？

(昔、12くらいで終わりだと聞きました)

U うわぁあん！

F ファザーが

J 銃弾に倒れたよ！

(戦場では珍しくない光景です)

U ウミガメの

F フライを

J 上手に作れました

(上手とかじゃなく、そんなもん作んなや)

U ウスが

F フンで滑ったサルを

J ジャンプして押し潰した

(報復とはいえ、あれはやり過ぎ)

U うん、分かってる

F ファックスで

J じいさんを脅すんだろ？

(事情は知らんが、やめたまえ)

U 運転中に起きた

F 不幸な

J 事故

(以前 y a s u が人身事故を起こしました)

U 嬉しいことに

F 不思議の国で

J ジョニーデップに会えました

(彼に会えるのならワンダーランドに迷い込むのもアリですね)

U 浮輪を

F 膨らます度

J 寿命が縮む

(肺活量の無い人には結構キツイ)

U うわ、ビックリした!

F 「フォー!」とか耳元で叫ぶなよ

J ジャクソンこの野郎!

(b y マイケルの友人)

U ウルトラマンに

F 踏まれて死んだ

J 住人もいるはず

(あれだけでかけりゃね)

U ウワアアア！！

F 太腿に

J ジャンボ尾崎の顔がああ！！！！

(怖すぎる！)

U ウキウキするよね

F 二人で一緒に堕ちた

J 地獄

(愛する人と一緒なら地獄だって天国さ！)

U 雲泥の差だよ

F フンと

J 地雷は

(フンもある意味地雷)

U アンラッキーとは

F 不幸という意味

J じゃよ

(じゃよ...？)

U 唸ってるぜ…

F 震える獲物を囲んだ

J ジャッカル共が

(by 獲物の男)

U 嘘つき！

F 二人で入ろうって約束したじゃない

J ジャクソン5に

(頭…大丈夫か…？)

U 美味しい！

F ファンタの

J ジャガイモ味！

(頭…大丈夫か…？)

U うーん、こんなこと書いてても

F 普通に

J 時間の無駄だよな

(急に冷静に…)

くだらねえ…(…)

へる おあ へぶん

> i 1 4 1 1 3 — 2 1 0 <

何気なく着ているシャツの英語を見てみると、“パンダパーティー”と書かれているではありませんか。

どんなパーティーなのか気になります。

無数の“たればんだ”達とマタリするパーティーなら最高だけど、“リアルパンダ”と行われるパーティーだったら最悪

現実のパンダは決して可愛い動物とは言えません。

奴らは人を喰らいます…

外人が日本でたまに変な漢字の書かれた服を着ていますが、日本人も外国へ英語がプリントされた服を着ていけば変な目で見られるんでしょうね。

光（前書き）

備忘録みたいな

光

アンセム「そう 心の真の姿とは——闇だ」

ソラ「闇じゃない！」

ソラ「心は弱いかもしれない 闇に負ける時だってある」

ソラ「でも——闇の奥には光があるんだ！」

アンセム「大いなる闇よ——」

ソラ「違うッ！ キングダムハーツはどんな闇も消し去る事の出来る
心——」

ソラ「光なんだ！」

キングダムハーツの一作目をクリアしたのは高一の時。
当時は常に「死にてえ」とか言ってるくらいネガティブで、ソラの
台詞が綺麗事にしか聞こえませんでした；

しかーし、感情に対する理解が進んだ今なら……わかるぜソラさん！

闇の奥に光がある、というのは、感情の中心核が明るくポジティブなものであることを意味しています。たぶん。

幸福、それが人のデフォルトであり、暗い感情はそれに纏わり付く影に過ぎない。

光と闇が別に存在しているのではなく、“闇の奥に光がある”と表現している辺りはとても重要だと思います。

自分はよく、闇から目を背けて別の場所に光を見出だそうとしちゃうんですが、

それは結局、闇に躍らされたうえでの行為。つまり不安に支えられた行動なんです。

そうやって見出だした光というのは酷く脆い。やっと掴んだ“幸せの証拠”を失うことに恐怖し、結局不安の闇にのまれてしまう。

闇と向き合い、その奥にある光を感じる。これこそが絶対的な安心、幸福感。

こういったものは相対的に得るものだと思いますが、案外そうでもないみたい。

恐れることを恐れず（）、思い切って暗い感情に飛び込んでみると、その先にある明るい感情（本質）が無条件に迎え入れてくれるんです。

闇ではなく、光に支えられた自然な行為、これこそが“自分を生きる”ということではないでしょうか。

絶望はもうお腹いっぱい。食えねえっすわ（笑

知る人ぞ知る有名な言葉ですが、『恐れる』ことが問題なのではなく『恐れることを恐れる』のが問題なんです。

恐怖に対する抵抗や回避といった行為は、かえってその恐怖を強力にさせてしまいます。しかし、受け入れて感じてやるとそれは消えていくんです。流れていく、と言ってもいいかもしれません。

嫌な感情が流れると、今度は心地よい感情と合流できます。それが本来の、自然な状態です。

憂鬱な気分というのは感情が流れず、停滞しているときに起こります。

光（後書き）

“不足感を埋めるための努力や向上心”を美德とする人もいます。それを正しいとか間違っていると判断はしません。

ただ、“満たされている”“何もしない”という誤解だけは避けてもらいたいところ。

むしろ能動的になり、己を高めることに大きな喜びを抱けます。

むりやり感謝

太陽さん、いつも僕らを明るく照らしてくれてありがとう。

月さん、優しい輝きで心を癒してくれてありがとう。

植物さん、気持ち良くしてく……酸素を作ってくれてありがとう。

電気さん、僕らの暮らしを豊にしてくれてありがとう。

メガネさん、おバカな僕を優秀であるかのように偽装してくれてありがとう。

サイババさん、人間の手から粉が出ることを教えてくれてありがとう。

お髭さん、リンカーンを大統領にしてくれてありがとう。

スパムさん、友達の少ない僕に唯一積極的にメールを送ってきてくれてありがとう。

ジャイアンさん、音痴な僕に勇気と希望をありがとう。

包丁さん、例の復讐を手伝ってくれてありがとう。

ピアノ線さん、密室トリックを成立させてくれてありがとう。

トイレットペーパーさん、摩擦でお尻から血が噴き出る時があるけどそのおかげで生を実感できてるのでありがとう。

將軍様、2ちゃんにネタを贈ってくれてありがとう。（爆発するものは贈らないでね）

はぐれメタルさん、死んでくれてありがとう。

マジックテープのふわふわじゃない方さん、痒い所をかくときに活躍してくれてありがとう。

孫の手さん、主に遠くのリモコンを取る時に役立ってくれてありがとう。

サッコファリンクスペレカノイデスアンブリストモプシスさん、優美に泳ぐ姿で僕らを楽しませてくれてありがとう。

いまいちだな…。

宇宙戦争

僕の勘違いかもしれませんが、
文明の発達には人間の『面倒臭がりな性格』と『性欲』が関係して
いると聞いたことがあります。

それが本当だとしたら、文明のレベルを誇るなんて恥ずかしいこと
のように思えてきますね。

超文明ともなると、

「どうだ俺達は超怠け者だぜ！！ しかも超エロいんだぜえ！！」
と言っているようなものです。ドン引きですね。

そして特に懸念すべきことは、異星人との交流。

異星人が来た時にあまりにも地球の文明が発達し過ぎていると、

「うわ、お前ら性欲強！！」

と言われるてしまいます。

ここで、

「お前らだって別の星に来られるくらい高度な文明築いてんじゃね
ーかよ、このエロ星人！！」

と言いつ返すと…

宇宙戦争勃発。

イカロス然り、神に近づき過ぎた人間は滅びの運命にあるのかもし
れません。

エビが嫌い

エビが嫌いなんだよ！！

死ぬほど嫌いなんだよ！！

何故かって？

気持ちわりーんだよ！！

あいつぁダンゴムシの仲間なんだよ！！

嫌いなものもちゃんと食べて栄養を取れって？

栄養なんて他の食材からでも摂取できるわボケ死ね！！

世界にやエビ知らんでも生きとる奴だっておるわ！！

食べ物に飢えてる国の人達のことを考えろって？

普段そいつらに募金とかしてるわけじゃねーのにこういう時だけ引
つ張り出して利用してんじゃねーよ偽善者が！！

エビがかわいそう？

エビをかわいそうな目に遭わせてんのはブツ殺した奴らだろカス！！
無駄な殺生をしてる国が多過ぎんだよ！！

本当に生き物のことを考えてねーのは食わねー奴らじゃねえ！！
もつとよく考えるクソが！！

もうどんな手を使ってもエビは食べられないのかって？

エビフライなら食えるわボケ！！！！

この歌詞に曲をつけてくれる方を募集しています。

脱ヴァンパイア

心が寂しい状態で人と接すると、どうしても相手から色々与えてもらおうと奮闘しちゃいます。

「目一杯の愛をあげる、だからこっちにも愛を送ってええ！」という状態です。

でもそういう時の優しさって、押し付けがましいものになってしまふので、相手にとっては鬱陶しいだけなんですよね；

「あ、優しい人。しかし……重い!!」となってます。

オイラもそうなのです。

苦しさを紛らわせるために好きな人を利用してました。まさに愛を吸い取るヴァンパイア。

こんなんだから人間関係の失敗も多い（爆

きつと、明るくポジティブな気持ちに従って行動していれば相手に依存せずに済んでいたことでしょう。「優しい人」と言われながら距離を置かれるということもなかったはずです。

明るい気持ちの時、それは自分を愛せている時。

「他人から愛されたければ、まず自分を愛せ」とはよく言ったものです。

自分で自分を愛してれば他人から愛を奪う必要はありませんもんね。見返りを求めない、“本当の優しさ”で接することができる理想的な状態かもしれません。

人によつては駆け引きを楽しんでいることでしょう。

でももし、それに疲れたら、色々画策するのをやめてみることをオススメします。

人との繋がりは、本当はとてもシンプル。

過剰な飾り付けなんて一切必要無い。

ありのままの自分が一番、魅力を発するのに適してるんですから！

無限の炎（前書き）

愛を炎に喩えました。

無限の炎

松明の火が消えた

周りが暗くなり 温かさも失われる

不安…

早く火を持つてる人を見つけなくては
そのためならどこへだって行く

僕は険しい森へと足を踏み入れた
必死に歩き続け ついに人を発見

僕はその人と仲良くなり松明の火を分けてもらった
すると今度は相手の火が消えかける

今度は僕が相手の松明に火をつけてあげた
相手の火が消えてしまったら 自分の火が消えてしまった時に困る
から

僕達は何度も何度もそれを繰り返した
互いの松明の火を絶やさぬように

そして…

いつしか与え合うことは奪い合いへと変わっていった

そんな争いを続けているうちに
二人の火は完全に消えてしまった

そこで僕達の関係も終わりを迎えた

僕はまた 別の人を探した

危険な山を上り なんとか新たな出会いを遂げる

そして前と同じように松明の火を与え合う

相手に気を遣いながら 慎重に

だが…

やはりあの奪い合いが始まってしまった

待っていたのは言うまでもなく同じ結果

二人の火は消えてしまう

結局 この関係も終わりを迎えてしまった

また一人に戻ってしまった僕は 自身の酷い有様に気が付いた
過酷な旅や火の奪い合いで体がボロボロになっていたのだ

僕は自分の体を抱き 泣いた

一番身近な人間を蔑ろにしていたことに気付いた

何度も謝り 感謝した

たくさん たくさん 優しくしてあげた

すると 抱いていた体が段々温かくなってきた

さらにその熱が松明へと伝わり 激しい炎を上げる
今まで以上に明るくて温かい…
なんて心地良いのだろう

松明が生んだ明るみに次々と人が集まってきた
僕は快く みんなに火を分けてあげた

不思議なことに 与えれば与えられるほど松明の炎は強くなる
全く消える心配がない

無限の炎…

ずっと僕の中で眠ってたんだね

無限の炎（後書き）

自愛が大事。

四字熟語を作った

週休七日

（月収は80万！）

現実充実

（リア充！）

三億贈呈

（なぜかいきなり！）

刮目人屑

（見る、人がゴミのようだ！）

目痛目痛

（目がああ目がああ！！）

龍球収集

（探そうぜ、ドラゴンボール！）

涅槃到達

（ニルヴァーナ！）

金属粘液

（メタルスライム！）

金属王様

（メタルキング！）

白金王様

（プラチナキング！）

金色粘液

（ゴールデンスライム！）

転職神殿

（ダーマ神殿！）

手粉噴出

（ビブーティー！）

錦野戦争

（スターウォーズ！）

殺人道化

（ITT！）

路上闘士

（ストリートファイター！）

夏塩少佐

（ガイル！）

眼帯禿虎

（サガット！）

反則力士

（エドモンド本田！）

仮面爪男

（バルログ！）

罪深齒車

（ギルティギア！）

薬中忍者

（チップ！）

盲目禁獣

（エディ！）

封炎悪男

（ソル！）

封雷団長

（カイ！）

浮世絵顔

（小雪！）

派手夫婦

（林家ペーパー！）

頼凸凹男

（南原！）

一発屋侍

（波田陽区！）

巨人狂人

（徳光！）

首領巨女

（和田アキ子）

世界平和

（綺麗なまとも！）

杖を捨てて…

何でもいいから、誇れるものが欲しかった

自信を持てる何かがあれば、現実が苦しくても心の安定を保つことができるだろうから

でもそれは、杖と同じだった

その支えに体を預けてしまうと、何らかの理由でそれを失った時、すぐによろけて転んでしまう

自信を外側の何かに委ねてしまうと、不安定で危なっかしい状態になってしまうんだ

僕に本当に必要なのは杖ではなく、支え無しに立てる二本の足だったんだ

欠点と感じている部分を許し、ありのままの自分を認める

それだけでいい

自分の足だけで立てた時、外界での行為は全て“目的”に変わる

はずだ

何かの条件として行為するのではなく、それ自体を楽しむために行
為するようになる

さあ、杖を捨てて好きな所へ行こう

僕らの足は自由を知っている

俺達は繋がっている

自分に4人の知り合いがいると、間接的に世界中の人と繋がっていることになるそうです。

例えば、一見何の接点も無い“俺”と“ゴルバチョフ”も、知り合いの知り合いの知り合いの知り合いの知り合いの知り合いの知り合いの知り合いの知り合い、という関係だったりするわけです。

そう考えると、街ですれ違う一人一人に親近感が沸いてきますよね。

みんなどこかで繋がってる。

変態

「ゲヒヤヒヤヒヤ!!」

一人暮らしのOL

「だ、誰ですかあなた! 人の部屋に勝手に上がり込んで!! 警察呼びますよ!!!」

警

変態

「間接的に知り合いなんだから別にええやろ!」

一人暮らしのOL

「あ、言われてみれば間接的に知り合いですよね私達。どうぞゆっくりにしてってください」

平和だ、、

俺達は繋がっている（後書き）

俺の友達、友達が、J a n n e D a A r c の y a s u と友達だ
そうです。

ウンコ

冷静に考えたら

みんなお腹にウンコが入っている

あの人気アイドルグループ “ なんとか48 ” もそうだ
48個分のウンコが舞台を駆け回ってるに過ぎん

ウンコを漏らした人に対し 周りの人間は軽蔑の眼差しを向けるだ
ろう

だがよく考えてみる
パンツの中のウンコなんて 体内のウンコに比べたらマシじゃない
のか？

自分の中にウンコが入っている
それを悟ってしまった人間に 安息は二度とおとずれない
真理を知った代償だ

もう嫌だ…

この世界で生きていく自信が無い…

謎は謎のままにしておくべきだったんだ…

父さん 母さん ごめんなさい

僕は一足先に ウンコの無い世界へ旅立ちます

肉まんじゅうの恐怖

そつえば今シーズン、一度もコンビニの肉まんを食べていない…。

不意にそんなどうでもいいことが頭を過ぎりました。

そしてこれもまたどうでもいいんですが、肉まんを“肉まんじゅう”って言うじゃないですか。僕はそう聞くと急にホラーな印象を抱いてしまふんです><；

恐らく、

『まんじゅう』『あんこの入ったやつ』

という固定観念があるためでしょう。

どうしても、“肉”と“まんじゅう”が頭で結び付かず、気味の悪い感覚に捕われてしまいます。

分かりやすく都市伝説風に説明しますね←

【伝説No.30 肉まんじゅう】

給食が終わり、昼放課が始まった。

運動場で遊ぶため、クラスのみんなが次々と教室から出ていく。

僕はそんな彼らを、いつも教室の隅で見送っていた。

「またそんな所にいんのか“明宏”。たまには外で遊ぼうぜ」

言いながら、友達の“啓之”が歩み寄ってきた。僕は幼なじみ

だが、タイプがまるで違う。

「知ってるでしょ？ 苦手なんだよ運動…」

そう返すと、啓之は僕のお腹の辺りに目を遣り、苦笑いを浮かべた。

「明宏さあ、最近一段と太ってきたよな」

「え？ そうかな…」

自分のお腹を摩ってみた。うん、確かに前より出ている。

「そんな体してると、お前もやられちまうぞ」

「え、誰に？ 何を？」

僕は首を傾げた。

「なんだ知らないのかよ、あの噂」

「噂…？」

放課後、僕は悩んでいた。

僕には下校中、いつも立ち寄る場所がある。町の三丁目にひっそりと佇む、小さなまんじゅう屋だ。

そのまんじゅう屋には優しいお婆さんがいて、僕が店の前を通り掛かるといつも美味しいまんじゅうをご馳走してくれる。

“学校帰りに美味しいまんじゅう”。それはすでに僕の生活の一部となっており、欠かすことのできない大きな楽しみ。

だというのに啓之が“変なこと”を言い出すので、今僕は少し行くのを躊躇っている。

「……バカバカしい。そんなことあるわけないじゃないか」

首を左右に振ってなんとか抱いている懸念を打ち消すと、僕はゆっくりと歩き始めた。まんじゅう屋へと続く、いつもの帰路を。

「おや明宏ちゃん、今日も来てくれたんだね」

まんじゅう屋の前へ差し掛かると、いつものようにお婆さんがま

んじゅうの乗ったトレイを持って出て来てくれた。

「いっぱい食べるんだよ。明宏ちゃんのために用意したんだからね」

「うん」

僕は笑顔で「いただきます」と言うと、まんじゅうを一つ手に取った。

——と、その時、僕の背筋に悪寒が走る。

僕は恐る恐る、視線をまんじゅうからお婆さんの方へと転じた。見ている。お婆さんが僕の体を見ている。そして怪しい笑みを浮かべている。

まさか本当に？ いや、そんなことあるはずない。だけど…。

「あの、僕、もう帰らないと！」

「え？ どうしてだい？」

そう尋ねながらお婆さんが僕の腕を掴む。その拍子に僕は持っていたまんじゅうを落としてしまった。

「ちよつと、用事を思い出したから…」

「どんな用事？」

「えつと…」

その時、僕の視界に何かが映った。

店の奥の居間で何かが散乱している。あれは…子供の服だ。そしてランドセル。

「ひっ…」

僕は怖くなり、一步後退りをした。だが引いた足が“ある物”を踏み、僕の体は硬直してしまう。

僕が踏んだ物、それはお婆さんに腕を掴まれた時に落としてしまったまんじゅうだ。そして問題は、踏まれたことによって飛び出したその中身。

——赤い汁。

一瞬、このまんじゅうは苺大福で、赤い汁は苺のものかと思った

が、そうじゃない。

これは“血”だ。

よく見ると、血を追うようにして生肉が溢れ出しているのが分かる。

何と言うことだ。啓之の言っていたことは本当だったんだ。
僕の脳裏で彼の言葉がフラッシュバックする。

『三丁目のまんじゅう屋。あそこの婆さんは、子供にただでまんじゅうを食わせて太らせようとするんだ。何でか分かるか？ 太った子供を殺して“肉まんじゅう”を作るためだよ』

「う、うわあ…！」

叫び声を上げようとする僕の口を、お婆さんの手が素早く塞ぐ。

「ヒッヒッヒ…。よくもまあこんなにあんなに太ってくれたね。おかげでたくさん、肉まんじゅうが作れそうだよ」

お婆さんは老人とは思えない力で僕の体を引き寄せた。

「さあ、おいで…」

店の奥へと後ろ向きに引きずられていく僕。

その目が最後まで映し出していたもの。それは潰れて血が溢れ出している肉まんじゅうだった…。

という話を想像してしまっているんですよ）……；
共感は……得られないかな……。

肉まんじゅうの恐怖（後書き）

主人公の名前は三輪明宏から取りました。

“伝説No.30”の“30”は、「みわ」という意味です。
友達の啓之は、江原啓之です。

マジ、どうでもいい。

妖怪さとり

押し売りに買わされた雑誌に、こんな話が載っていました。

これはかつて山仕事をしていた人たちの間で知られていた話。

きこりが山で木を伐っている、見たこともない生き物が寄ってきて、彼の仕事をからかったというのです。

珍獣

「おいきこりコノヤロバカヤロ！」

きこり

「うわ、何だこいつマジうぜえ……」

きこりはこの珍獣を生け捕りにしてやろうかと思いました。
すると珍獣は、

珍獣

「ウヒヤヒヤヒヤヒヤ！ お前、俺を生け捕りにしてやろうと思っただろ！」

と言って嘲笑います。

きこりが人の心が読めるのかと驚くと、

珍獣

「人の心が読めるのか、と思っただろポケエ！ バレバレだったのwww」

と言って大喜びです。

腹を立てたきこりが、「このデモンズアックスでブチ殺してくれよう」と思うと、

珍獣

「今度は俺を殺そうと思ったな！ しかも斧に変な名前をつけてやる！ お前は中二病だwww」

と言って爆笑します。

これでは仕事になりません。こんな奴は放っておこうと思って、また木を伐りはじめると、また珍獣が口を出します。

珍獣

「いやーん、こんなんじゃ仕事になんない、もう放っておこうかしらーん……と思ったな！」

きこり

「ちょ、待て待て！ 何でオカマ口調なんだよ！ そっちじゃねーよ俺は！..」

きこりはもう珍獣にはかまわず、木を伐ることに集中し、やがて、力の限り斧を振るうことに没頭していきます。

すると、斧の柄がゆるんでいたのか、振り上げた拍子に斧の頭が外れて飛んでいきました。斧の頭は無心です。人の心が読める珍獣も、

無心にはかないません。斧の頭に直撃をくらってしまいました。

珍獣

「あぶな〜、もうちょっとで斧が当たるところやった」

きこり

「いやいや、当たってるがな」

珍獣

「なにい！！？ くそお…こんな恥ずかしい名前の斧で死ぬのか俺は……」

きこり

「うるせー」

珍獣は死にました。

珍獣の名前を「さとり」というのですが（よく聞きますよね）、この「さとり」の正体を、ある民話研究者は木霊を擬人化したものだろうと解釈しています。まったく萌えない擬人化です。

しかし記事の筆者は珍獣の正体を、もっと別の、我々の身近な存在と解釈していました。

自分自身の心を読んで、非難したり、責め立てたり、ときにはおだてたり、そのおかしさたりする、「もう一人の自分」。それがさとり

の正体ではないか、と。

誰もがこの意地の悪い「もう一人の自分」という珍獣を、心の内に飼っているようです。「お前は弱い駄目な人間だ」「才能などない。努力しても無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄！！」「人はお前を笑ってるぞよ」などと囁きます。

この「もう一人の自分」に翻弄されないためには、とにかく目の前のことに熱中することが大切なようです。

今この瞬間を全力で生きること、それが自分自身の弱い心に振り回されない一番の方法……という記事でした。

俺と彼女と自転車と

“自転車の二人乗りをしている男女”

それを見かけるたび、俺の胸は嫉妬で強く締め付けられた。

『俺も自転車の後ろに愛しい人を乗せて走りたい！ 神様、お願いします！』

その想いが届いたのか、最近俺の自転車の後ろには、一人の女性が座っている。

半透明の身体で、頭からいつも血を流しているちよつと個性的な娘。
「オマエモ……シネ」という口癖からは、小悪魔っぽさが伺える。
もうとにかく魅力的なんだ。

…と、ここでいきなり話を変えるけど、最近自転車の調子が悪い。
赤信号で停まるうとする時に限って、ブレーキがきかなくなる。今
月だけで10回くらい車に轢かれそうになった。

後ろの娘にも相談したんだけど、「オマエモ……シネ」って返事し
か返ってこないし。ほんと参るわ。

あー、あと、最近やたら除霊師とか言うのに絡まれる。

俺そついう胡散臭いの嫌いだから、マジ勘弁してもらいたい。

ニーチェから自愛を学ぶ

拙者はよく自愛をテーマにした話を書きます。

無条件に自分を愛する、全てはここから始まると思うのです。

心理学やスピ系の本を読んでも、行き着く所はやはり、有りのままの自分を認めてやるということでした。

某番組で語られていたニーチェの思想も大変参考になりました。

例えば、ひきこもり。

価値観を世間の基準に合わせているから、辛くなって動けなくなるのだそうです。

無条件に自分を全肯定できると心が自由になり、自然と体が動いて結果的には社会に溶け込むことができるんだとか。

「ひきこもりだけど俺って最高！」

この気持ちが必要です。

演繹 帰納

【演繹法】

思考を暴走させ、主にも読めない話の展開を生み出す。上手くいけば絶大な破壊力を引き出せるが、まとめる力の無い者が手を出すと壮絶な死が待っている。

拙者がある長編を演繹法で描いてみたところ、テンポやノリが出しやすく、自分にも先がどうなるのか分からないので描いてて楽しかった。

でも矛盾がたくさん出てきたり、ついつい風呂敷を広げ過ぎてしまったりして、そのうち壮絶な死を迎えそうでござる。

【帰納法】

ゴールを定め、そこに向かって話を作る安定重視。親にレールを敷かれた人生と同じで、面白みを出し辛いという難点がある。

拙者がある話を帰納法で描いてみたところ、まとまりはするがやはり威力が出しにくかった。

先にオチを決めるというのは厳しい制限を設けているようなものなので、発想にブレーキがかかってしまうのでござる。しかもその最後のオチがつまらなかったら最悪でござる。そして拙者は大体そのパターンなのでござる。

さて、結論を出すナリ。

拙者には演繹法で短い話を描くのが一番いいみたいナリ。

とりあえずちゃちゃっつと、いきあたりばったりで描いて、あとから整えればいいでござる。

帰納法を使う時も、明確なゴールは決めない方がいいかもしれんでござりんじ。

しょぼ過ぎて使い所を見失ったネタ

どこかで使ってみようと企んでいたけど、タイミングがなくて何年も眠っていたネタ達です。

すごく寒いけど、捨ててしまつくらいならここで…

A

「俺今まで、如意棒をチ○コのことと勘違いしていたよ」

B

「なんでそうなるんだよ？ あ、伸び縮みするからか！」

A

「いや、“尿意棒”」

兄

「ひく恥ずかしい！ 穴があつたら挿れたい！」

妹

「それを言うなら“入りたい”でしょ？」

兄

「いや、插れたい」

『強襲！ 巨尻ケツデカス！』

モンハンのパロディー。顔がケツの怪獣が凄い勢いで襲ってくる。

666人の男性アイドルグループ
『OH！ MEN！（オーメン）』

達人

「ワシは雲丹を食べば食うほど強くなる（酔拳みたいに）」

弟子

「燃費わりーな」

不治の病の人に対して、

「口内炎ですか、僕もなんですよ」

首めり込み族

（首長族の逆ver）

花粉症なのに杉の山へ。

花粉症の男

「今の俺は、まるで殺虫剤の実験施設に迷い込んだゴキブリだぜ！」

→

HEROの体験談

有限の中の無限

4コマ、川柳、あいうえお作文など、一定の制限の中に絵や文字を当て嵌めていく作業が好きです。

こう…何と言うか…、有限の中に広がる無限の世界？ みたいな？ 不自由の中にこそ安らげる自由がある。そう、人生と同じです（うるせえ

小説を書くときも、たまに4コマのネタを引き伸ばして使うことがあります。完成度は分かりませんが、書くぶんによ都合が良いです。ただ、4コマは余分な所を削りに削って作るものなので、できあがった小説も内容がギチギチしています^^；

ちなみに4コマを元にしていない小説も、展開が早くなってしまいがち。表現を最低限にすることに慣れてしまったからでしょう。（か、勘違いしないでよ！ 面倒臭いからとか、そんなんじゃないんだから！！）

なんかもう小説をナメてますが、こんな感じでいいと思います。何事も自分のやりやすい方法でハアハア言いながら楽しんでりゃいいんですよ、ウヒヒ。

自分を楽しませることができなきゃ、他人を楽しませることなんてできませんからね、ウヒヒ。

そう、自分を楽しませること、こればかりは4コマや川柳とは違い、制限があつてはならないのです。

余計な枷は全て取っ払って馬鹿になっちまえばいいんですよ。

では最後に、あいうえお作文で自己紹介を。お題は「H E E R O」です。

H 変態で
E エロいことを
E 延々と考えてる
R ろくでもない
O 男です

ヘビローテーション

ずっと前から、AKBのヘビローテーションが脳内でループ再生されて困っていたのですが、

先日ついに、無意識のうちに口笛まで吹いてしまいました。

AKBの曲は恐らく意図的に、中毒効果が出るように作られているのだと思います。

精神安定剤もまるで効果が無く、メロディーが執拗に頭に纏わりついてきて恐怖すら感じました。数週間程、真夜中に汗だくで目が覚めることが何度もありました。虫の群れが体を這い上がってくるという幻覚にも悩まされました。

カウンセリングを受けて分かったのですが、どうやら俺には“AKB BⅡファンがヤバイ”という固定観念があるらしく、それが“曲を聴きたい”という欲求を抑圧していたようです。

今日、携帯オーディオにヘビローテーション…、いや、ヘビロテを入れてみました。

余計なことは考えず、これから聴きまくってみようと思います。

テスト

この間、自分の深層心理を解明するため、心理士の先生に心理テストを出していただきました。

受けたテストは“バウムテスト”という果実のなった木の絵を描くテストと、

模様が何に見えるのかを答えるテストです。

どちらのテストも過去に心理学の本で読んだことがあるので、ちょっとだけ自分で分析することができてしまつのですが、何も知らないふりをしてテストを受けました（大人！

木の絵は、エデンの園をイメージして全力を尽くしました。

やたら描きこんだせいか、先生に「普段絵を描いてるの？」と聞かれました。

模様を答えるテストでは、ある模様がエレキギターに見えたことから J a n n e D a A r c の話題に脱線してしまい、先生と y a s u の美声について語り合いました。

先生は記録用紙に“J a n n e D a A r c”と“A c i d B l a c k C h e r r y”を記録していました。一体そこからどんな心理が分かるのでしょうか…。それとも先生（♂）は俺のことが好きだから趣味をチェックしたのでしょうか…。

【テストの結果】

先生（♂）はそっちでした。

食事プレイ

ご飯とおかずの関係は、実にいかがわしい。

酸っぱい梅干しを食べる

←

酸っぱい＝つらい

←

その苦しみから逃れたい

←

ご飯を食べる

←

苦しみが緩和

←

エクスタシー

辛いキムチを食べる

←

辛い＝つらい

←

その苦しみから逃れたい

←

ご飯を食べる

←

苦しみが緩和

←

エクスタシー

“首をギリギリまで絞めてからその手を緩め、酸素を吸える喜びに浸る”

それに近い行動が毎日食卓で繰り返されている。

…変態。それが、我々人間の本質なのだろう。嘆かわしいことである。

おばあちゃんの知恵袋

孫

「おばあちゃん！ ツトム君に虐められたよ」

おばあちゃん

「おやおや、また虐められたのかい？」

孫

「酷いこと言われたんだよ！」

おばあちゃん

「よし、それじゃあ今日はこの話をしようかね」

孫

「わーい！ おばあちゃんの知恵袋の始まりだ！」

おばあちゃん

「…人間なんてもんはなあ、電気信号で動いただけの肉人形なのさ。あんたが言われた悪口も空気の振動に過ぎない。そう、全ては物事と結果、ただの現象なんだよ。善も悪も、幸も不幸も、本来ありはしないのさ」

孫

「じゃあツトム君を血祭りにあげるのも悪いことじゃないんだね？」

おばあちゃん

「もちろんさ。価値無き存在である肉人形一体の機能が停止する、ただそれだけのこと。さあ好きなだけ殺れ！ 奪え！！ 犯せええ

え
「！！！」

孫

「うん、分かった！」

嫁

「あなた…またお母さんが変なこと言ってるわ…。もうやめさせてよ」

息子

「しょうがないだろ、アルツハイマーなんだから…」

自愛で無敵になろう

無敵、それは敵を作らないコト。

自分の内側から愛を供給すれば、他人の愛を吸い取る必要がなくなる。他人からの愛を求めない限り、憎むことはない。つまり敵視しなくなる。

人間の怒りや悲しみは突き詰めると「愛のへ欲求」に行き着く。それを自分で満たしてる人は他人に感情をぶつけて愛を要求する必要がなくなる。

自分が満たされていれば余裕が生まれ、他人のために何かしてやりたいと思える。見返りを求めず、愛を与えたいと思う。

このようなギブ アンド ギブの精神を持つ者同士の関係は非常に上手くいっている。

俺は相手から与えてもらうことばかり考えてて、痛い目に合うことがとても多かったです。

嘘つきでも暴力的でもアホでも何でも、そんな自分をまるごと認めてしまえばいい。今のままでいいんだよ、と優しく語りかけてやる。そうすると段々嘘が必要なくなる。拳に訴えることもなくなる。賢い自分に気付ける。人の価値や、幸せになることへの条件を取っ払うことができる。

自分を裁くことをやめると、他人を裁くこともなくなる。何故なら、人が人に嫌悪感を抱く時というのは、自分の中の許せない要素を相手も持っていた時だから。

「ねばならない」とか「であるべき」なんてくっだらねえ制限に縛られる必要は無いんじゃないやよおおおい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4692/>

Jの領域

2011年11月30日13時03分発行